

人間を減らして地球を救おう

地球が危ない。環境の破壊が進んでいる。このままじゃあダメみたいだ。

ということぐらいなら、誰だって知っています。

でも同時に、何とかなるんじゃないの、とも思っている。考えたってしょうがないやとか。環境がぐじゃぐじゃになるころまで、私はどうせ生きていないし、とか。よく言えば、楽天的。はっきり言えば、無責任。意識の進んだ「広告批評」の読者が、それではないません。

そこであなたは、環境にいいこと何かしなくちゃ、と考えることになる。

何か環境にいいことというと、リサイクル、とみんなまず口をそろえます。牛乳パックを洗って干して、アルミ缶は踏んづけて、ペットボトルは分別回収。手間もけっこうかかる

リサイクルぐらいでえらいような顔をしないこと。そして、人間のせいで地球がどんなにいたぶられているのか、今晚ねる前に十分間ぐらい目をつむって、思いをこらしてみても罰はあたらぬ。

さて、じゃあ専門家は、環境問題をどう考えているのか。

国際会議を開けば、そのたびに、報告書の結論は「持続可能な発展」。英語で sustainable development と決まっている。環境は破壊されずに、経済が順調に発展し、人びとの暮らしがだんだんよくなるという願ってもない話です。

そんなふうに行くのなら、世話はない。

「持続可能な発展」なんて、だいたい嘘っぱちなのです。会議のテーブル越しに、先進国は地球環境が大切だと叫び、第三世界の国々は俺たちにも経済成長する権利があるとわめき返し、議論は平行線。仕方がないから足して二で割り、「持続可能（＝環境は守る）な発展（＝経済成長もする）」と作文してお茶をにごす。矛盾しているのだから、そもそも実行不可能。こんなお題目を何回唱えても、地球環境が守られるはずはない。

6-6661

た国際合意だ。これ以外の結論を出すわけにはいかない。そこで専門家は、ともかくこじつけて、「持続可能な発展」ができますという都合のよいデータを必死で集める。そのうち自分も暗示にかかって、なんとなくそれができそうな気がしてくる。「持続可能な発展」は、専門家や政治家やジャーナリストの思考を停止させるマジック・ワードなのです。

そんなのにのんびり構えている暇はない。地球がいま、どんなに大変なことになっているか、ぎよっとする数字がいくつもある。

たとえば、地球上の動物の体重。1000トンのクジラが一万頭いるので1000万トン、などと計算していったら、地球全体の動物の体重を合わせると、ざっと40億トン。では、どんな動物の割合が多いのか。第一位はウシで、全体の約15パーセントを占める。そのつぎは何と、人間。60キロ×60億人として、約36億トンだ。

これがどれくらいの量かというのと、比重を一とすれば、霞ヶ関ビル（84m×41m×147m、50・63万トン）と同じ大きさの箱にぎっしり詰め込んだとして、全部で711個にもなる。以下、ブタ、ニワトリと続き、野生動物などはごく微々たる割合にすぎない。（高橋

正征「生態人」への道 BIO city No.2 1994 118 (119頁を参照)

この体重の割合で、蛋白質も、それぞれの動物に分配されていると考えられる。このうちウシは、ステークや牛乳となって、人間に蛋白質を提供するために飼われているわけだし、ブタやニワトリも同様。要するに、地球上の動物蛋白を人類がほとんどひとり占めにしてしまっていることがわかる。

おまけに、まだ殖え続けている。食物連鎖というものがあろうでしょう。地球にふり注ぐ太陽エネルギー（ほぼ一定）↓植物（特に穀物）↓動物↓人間、という関係が、厳然と存在する。殖えすぎた動物は、天敵に食べられてしまつて、バランスを回復することになっている。ところが、人間は何でも食べるうえ、天敵がないから、殖えるいつぱう。このままの勢いだとなら、殖えすぎた動物を突破する。どう考えても、地球上で養つておくことができる蛋白質の量を上回っている。

まるで紅茶キノコですね。はじめはめずらしいから、小さなかけらを大事に紅茶で育てていたはずなのに、そのうち瓶はキノコで満員、今度は憎らしくなる。最後には捨ててしまったでしょう。人間も殖えすぎで、地球からあふれんばかり。まさに紅茶キノコ状態です。

す。ちょうどよいのは、いまの人口60億人の十分の一、せいぜい6億人ぐらいでしょう。そこまで減らさないと、地球がもたない、それも大急ぎで。

人口を十分の一ぐらいに劇的に減らすには、いちばん手っとり早いのは戦争です。理由はなんだったっていい。顔つきが気に入らない奴だと思つていた。とにかく因縁をつけて、戦争を始める。戦争をするのは嫌だという国には、それを理由に戦争をしかける。化学兵器や生物兵器のように、あまり環境を破壊しないで効率よく人間を死なせる兵器も、じゃんじゃん使う。三十年戦争や百年戦争という前例もあるのだから、いちど始めた戦争はなるべくやめなさいがねばる。

というふうには、戦争をやりたいくずくずしている政治家がいらないですねえ。ヒトラーでさえ、せっかく開発した毒ガス兵器を、仕返しを恐いからと使わなかった。そのあと、ますます平和が好きで政治家ばかりで、毛沢東はニクソンと握手するし、ものわりのいいゴルバチョフが出てきてベルリンの壁は崩れるし。こんな調子では大戦争は、何年待っても当分は起こりそうにない。

*

戦争で人数を減らすのは、無理らしい。それなら、体重を減らすという手もある。遺伝子を改良して、人間の体重を十分の一、5、6キロぐらいにしよう。まあ、太ったネコ程度ですね。

あなたの家で、いったい何匹ネコを飼えるか。五匹や十匹は飼えるでしょう。ニャアニャアうるさいのを我慢すれば、五十匹も可能ではない。これが子どもだと、そうは行かない。三人でも大変だ。体重が違うからです。ネコは、食事の量も少ないし、寝るのにも場所も取らない。資源が十分の一に節約できる。あなたがネコになったと考えると、こんなに狭い家が家も、高層マンション並みにひろびろびろです。

それだけではない。ネコが自動車に乗ったとしましょう。すれ違うのもやっとの日本の道路だって、片側二車線の高速道路に早変わり。これなら狭い日本にも、楽々十億匹のネコ、いやネコ並み人間が暮らせる。

そこで、世界中の学者は全力をあげて、人間の体を小さくする遺伝子を発見しなければならぬ。そして、胎児の遺伝子に組み込んで、新しく生まれる人間は、体重が6キロ以上にならないようにする。念のため、世界中

の国は残らず「体重の制限に関する国際条約」を締結する。これが、地球環境問題の解決でなくて、なんでしょう。

人類ネコ化作戦こそ、地球を救う。「広告批評」の新年号を読んだ小淵内閣が、これを世界に提案する日も近い。

ひとつ、困ったにやあとと思うのは、体重といつしよに頭も小さくなってしまふこと。人間の頭は脳だけで2キロ近くもあり、残り4キロ弱の胴体でこれを支えるのは無理。よたよたしてしまつて、ネコのような敏捷な動作は望むべくもない。そこで、頭も同じ割合で小さくすると、約200グラムになってしまふ。こんなに小さくては、知能もネコ並みに退化してしまふかもしれない。もちろん自動車にも乗れません。

*

体重が減らせないとすれば、やっぱり人数を減らすしかない。

生まれてしまった人間を戦争で殺すことができないなら、これから生まれる子どもも人数を減らす。

中国は二十年ほど前に一人っ子政策を始めただけれど、遅すぎた。建国当時は4億人だった人口が、いまは12億。増えている人口をストップしようと思つても、急には無理だ。は

い。

鉄やガラスなど、大抵のものも格安で入手できるようになる。なにしろ、都市全体が資源のかたまりのようなもの。その辺からひっぺがして持つてくればいいのだ。

土地が余るから、農産物の値段も安くなる。その割りに人手不足で、賃金はますます。ということは、人口が減るにつれ、年々生活が豊かになるといふことだ。

いいことづくめのなかで、しいて難を言えば、年寄りばかりで若者がおらず、寝たきり

ずみがついているから、効果が出るのはかなり先になる。

世界中が中国の真似をして、たつたいま一人っ子政策を実行したとしても、だから間に合わない。人口はやっぱり、百億を突破してしまふ。

そこで思い切つて、五組の夫婦に子どもは一人までと、どの国も法律で決めることにする。

月曜日は天野さんち、火曜日は鳥森さんち、……金曜日は笠原さんち、と子どもをたらい回しにする。週末の土曜日と日曜日は、子どもの好きな家に泊まる。いろんな親にもまれ、子どもにはたくましい社会性が育つだろう。親も競争なのでうかうかできず、子育てに真剣に取り組むはずだ。

それはいいが、自分の遺伝子が子どもに伝わらない、と文句を言う親もいるかもしれない。

自分の遺伝子などとはおこがましい。どうせどこかの先祖からだでもらっただけのくせに。同じ遺伝子が兄弟や親戚中にばらまかれてるにちがいがなく、実にありふれた遺伝子だ。でもいちおう、人情にも配慮して、五組の夫婦の遺伝子をこちやこちやにませ合わせ、誰かに妊娠してもらつて子どもをつくることにする。めんどろくさいが、この愛くる

しくて頭のよいところは、やっぱり私の遺伝子のおかげ、とどの親もにんまりできる。これなら文句ないでしょう。

*

人口がどんどん減つていく。こんなにはすばらしいことはない。

何がすばらしいかと言って、まず、地価がみるみる安くなる。あくせく働かなくても庭つき一戸建ての家がいくつも売りに出てくる。ついでに、別荘の五、六軒だつて夢ではな

になつても世話をしてもらえないこと。でもこれだつて、実は、願つてもないビジネス・チャンスだ。自動車やコンピュータに代わる基幹産業として、介護ロボットに投資を集積する。人間の声を聞きながら、かいがいしく働くロボットたち。かゆいところに手のとどく「しとやかさん」や力持ちで頼りになる「ますらお君」を、日本の家電メーカーが開発する。というわけで、老後にはなんの心配もない。